

## 岡本花亭と李明五—朝鮮通信使との交流をめぐって—

台湾大学 朱 秋而

近世後期の江戸の漢詩人は、江湖詩社を中心とする下町派と幕府に勤める山の手派に分けることができる。岡本花亭（一七六七～一八五〇）と館柳湾（一七六二～一八四四）は、幕吏でありながら、詩壇の耆老と見られている。市川任三氏は花亭を当時詩壇の「太宗五山」高く評価している。ただ、近年の研究では異論も見られる。

花亭詩集の出版は何かの原因で途絶えてしまって、完全な詩集は残っていない。わずか『保三十六家絶句』に一部の作品を見ることができる。そのなかに「文化辛未年、（八年、一八一—、時に花亭、四十四歳）、朝鮮通信使来りて対馬に館す。余、職事を以て往く。夜、淀川を下る。雪月清妙、詩、数首を賦して、以て事を紀す。今、退閑、此の図を觀れば、宛然たる真景、恍たる夢境なり。因て旧作の臆に上る者一首を録し」という詩を残している。

本報告では、先学たちの花亭詩の調査と研究を踏まえながら、詩人花亭の作品とその意味を朝鮮通信使の李明五という詩人との交流を通してもう一度取り直したいものである。